

国際政治理論の重要性

浅川 公紀

(武蔵野大学政治経済学部教授)

一 はじめに

九・一一テロ以降、国際関係の捉え方が難しくなっている。国家と国家、国家と地域との関係が流動的になり、現状に対する認識が容易でなければかりでなく、いつそう予測を立てられにくくなった。そうであればこそ、今こそ、理論的フレームワークを手がかりに国際政治のダイナミクスを理解し、問題解決の処方箋を描く作業が必要であるように思われる。

二 二つの潮流 予測の難しさ

冷戦期は米ソ東西両陣営、時として中国と第三世界の微妙な力関係・バランスの上に個々の国家と国家の関

係が存在していた。しかし冷戦崩壊後、米国一極体制が出現し、国際政治・経済で強力なイニシアチブを發揮するようになった。しかし、米国の一極支配も長くは続かなかつた。

クリントン政権は第一期において経済のグローバル化を謳歌した。そしてより確実な安全保障を目指し、世界各地での軍事プレゼンスを強めた。だが、中欧の政治バランスの空白が旧ユーゴスラビア連邦での民族・宗教紛争を悪化させ、中東・中央アジアのイスラム諸国での宗教原理主義回帰の波はイスラム・テロ組織の伸張につながった。

さらに、ヘッジファンドに代表されるルールなき金融グローバルイズムは、東南アジアで発生した金融危機を引き起こし、世界経済に大きな傷を残す。この経済的変動はやがて、欧州・中国に経済的繁栄をもたらす一方、米国には、今日のサブプライムローン問題につながるいびつな金融経済状況を生み出すことになる。

一方、二〇〇一年九月に発生したイスラム・テロ組織アルカイダによる米同時多発テロは米国を「テロとの戦い」へといざない、出口の見えないイラク戦争に踏み出すことになる。米経済と軍事力の逼迫は、国際秩序に対する米国の一極支配を過去のものにしていくと表現される状況が生まれている。

この十年来、急速に変貌を遂げる国際社会は混迷化しているといっても過言ではない。国際社会を動かす新たなキーワードは情報技術（IT）、金融・環境問題のグローバル化、国家による問題解決能力の低下、民族主義と宗教原理主義の台頭、非政府組織（NGO）の飛躍的增加にみられる国際的な規模での市民活動の勃興などが挙げられる。^①しかし、こうした要因を紐解いても、米国を始め世界が進もうとしている方向性は容易には探れない。

現在、世界を取り巻くさまざまな問題は過去の冷戦体制時代からの「負の遺産」とも言える部分を持ってい

る。一例を挙げると現在、欧米諸国に立ちはだかるイスラム・テロ組織の問題は、冷戦末期にブレジネフ政権が断行した旧ソ連のアフガン侵攻に起因している。

国際社会を取り巻く問題を理解するには、冷戦期あるいは九・一一テロまでを一つの時代として踏まえつつも、その当時起こった事実を確認し、その上で現在の国際的あるいは地域的多国間機構・多国間関係を個々に分析し、イデオロギーに左右されない現実的な視点で問題を探り、事象がどう変化しつつあるかを理解する必要がある。

政治科学としての国際関係論は起こってくる事象のパターンを探り、理論とモデルを構築することが主眼とされる。このモデルを通じて、「国際社会で何が起こったのか、何が起きているのかを分析し、何が起ころうとしているのかを予測する。その行動規範を規定すること」にある。²⁾ その分析方法は科学的手法もしくは行動科学研究と呼ばれ、過去に起こった事象についてさまざまな要因を検討し、対象となる出来事の規則性と共通性を見出し、これを理論化しようとするものである。³⁾

国際政治・国際関係の分析にはさまざまなタイプがあるが、その立場において「リアリズム（現実主義）」と「アイディアリズム（理想主義）」の二つの潮流が存在する。理想主義はリベラリズム（自由主義）の根幹にその思想を残して発展してきている。この二つのいずれのスタンスを取るかで、科学的手法を使って同じ事象を分析するにも大きな違いが出てくる。

世界秩序の将来に関する論争はこの二つの学派を中核として繰り返されてきた。前者からはいわゆる伝統主義的立場に則るナシヨナリズム、リアリズム、リアルポリティック、バランス・オブ・パワー、ナシヨナリスト、国家中心派などの概念が連想される。後者は理想主義、新世界秩序、グローバリスト、リベラルな国際

主義者などの概念と関連した学派である。

リアリスト学派の信奉者はパワーポリティックスが国際関係の推進力だと信じている。リアリストの主張では世界舞台の中心にあるのは、相争うそれぞれの国益を守ろうとする国家間の闘争である。国の勝ち負けを決するのはパワーであるというのがリアリストの信条であり、したがって政治が目指すところはパワーを増強し、パワーを維持し、パワーを見せつけることであると主張する。そして国とその指導者は、賢明であるなら、必然的にその外交政策の根拠を国家生存に据えざるを得ない、と続ける。というのも、ダーウィン主義者であるリアリストの見るところ、弱肉強食の世界にあってパワーは国の適者生存の鍵であるからである。

理想主義者はリアリストと多くの点で異なる。第一に理想主義者は、パワーを獲得し、維持し、行使することが国際政治の本質であるべき、とは考えない。著名な理想主義者リチャード・フォークは「国家システムに對抗する社会的規範への熱望や制度上の取り決めに対する規範への可能性の両方を軽んじる傾向がある」とリアリストを批判している。⁽⁴⁾

三 リアリズム パワーの強調 国際競争社会

リアリズムは、第二次世界大戦を防ぎきれなかった反省から生まれた「国家間に存在する力の均衡を保ち、伝統的な国際秩序を維持すること」に重きを置き、より現実的な問題解決を探る研究である。一方、リベラリズムは「世界はより良き方向に進むべきであり、国家間の関係、国際秩序はより理想の状態に近づくべき」との視点から国際政治を論じる学派である。この二つの思潮の存在は、政治的人間観の違いに由来するとされる。

リアリズムを標榜する人々は、自書『リヴァイアサン』で「万人による万人の闘争」を唱えたホッブズにつながる古典的な人間観を持ち、人間とは自身の欲望を追求する存在であると定義する。この考え方に従えば、自らの欲望の実現のためには他者の犠牲を厭わないため、政治的な闘争は避けられない。というのも、人間は生まれつき邪悪な一面を有しているからである。⁽⁵⁾したがってリアリストは政治にはほとんど期待を寄せず、それがひいては国家や国民への期待のなさにつながっている。⁽⁶⁾リアリストが述べているように、「悲しいかな、国際政治は常に残酷で危険な代物だったし、おそらくそれはこれからも変わらないだろう」。⁽⁷⁾

国際政治学でのリアリズム派は、こうした過酷な生存競争の概念を国家・地域間の関係にも当てはめ、国家の基本的なスタンスを他国との政治的闘争と見ている。古典的リアリズム派は、人間の本質には欲望を実現するため他者を押しつける「悪」が存在し、こうした人間の総体である国家も同様の傾向を持つと見たわけである。近代国家においては、個人と個人の衝突は司法・行政によって制御されている。これに逆らえば、国家と言う装置によって罰せられる。しかし、当の国家はどうだろうか。二十世紀後半の代表的な古典派リアリスト・国際政治学者ハンス・モーゲンソーは、「人間の行動に普遍的に存在する悪意 (evil)」は「キリスト教会を政治的組織に、市民革命を独裁政治に、愛国心を帝国主義に変質させた」と解説する。⁽⁸⁾この「悪意」が国家すらも蝕んでいるとモーゲンソーは断言している。

古典的リアリズムが人間個人の性質をもとに国際政治を論じたのに対し、米国の政治学者ケネス・ワルツは一九七九年、より構造的な問題を突いた「ネオリアリズム」を発表し、冷戦下における国際関係論に大きなインパクトを与えた。ワルツは、国際社会の中で国家を統治する権限を持った組織がないことを指摘し、国際社会の本質が主権国家間の競争を前提とする「無政府状態」にある状況を不可避とし、各国家は生き残るために

それぞれの国益を追求すると説く。⁹⁾

ネオリアリストが言うように、従うべき高位の権威がない主権アクター（国家）に基づく国際システムは「安全と秩序を提供する支配的権威がない無政府状態」である。そうした自助システムの行き着くところは「生き残り、繁栄するために各国家が頼ることができるのは自分の資力（Resources）だけ」ということになる。「公平かつ権威ある紛争解決手段、すなわち世界政府が存在しないために、国家は独自の裁判官、陪審員、絞首刑執行吏（死刑執行人）を抱え、多くは安全保障上の利益を達成せしめるための手段を有する。」¹⁰⁾

ネオリアリストは国内で何が進行中であるかにはほとんど注意を払わない。例えば、国が民主主義国家であろうが独裁国家であろうが、さほど重要ではない。それぞれの国の信条やイデオロギーにかかわらず、あらゆる国の外交政策は同じ体系的要因に動かされている、とネオリアリストは考える。つまり、国家はいくつもの「ビリヤードの球」で、政治幾何学および政治物理学の同じ法則に従って動いている、とする。¹¹⁾

ネオリアリストにとつて、国際社会の構造はそれを構成する国家の軍事力によつて定義されるため、国際協調や世界平和・正義の実現には悲観的である。¹²⁾

国際間の利害の対立による争いの根絶は、古典的リアリズムは人間の本性が悪であるため、また、ネオリアリズムにおいては国際協調を強める各国間の相互依存性、国際平和維持機関の限界を理由に上げ、双方とも不可能と見ている。古典的リアリズムは人間性を強調し、無政府性に焦点を当てる。このため、新旧二つのリアリズムは基本的に「力が正義を生み出す」との姿勢を崩さない。

すなわち、リアリズム派にとつて国際社会の主要な動きは、お互いの国益を守ろうとする主権国家間の対立・抗争が起因となつて発生する。その政治観は生き残るための力による闘争であり、秩序なき国際社会の中で生

き延びるためには、国家の治安や軍事や経済、地域への影響力など全てが「力」として定義づけられている。⁽¹³⁾
このため、リアリズム派が示す現実的政治行動において遵守すべき原理は、以下の四点となる。

四 リアルポリティックの原理

第一の原理は国益の確保であり、他国との共存・共栄は二の次となる。リアリストの見解は、権力に駆り立てられた結果、紛争が引き起こされるといのが政治の本質であり、「国際関係に進展は望めない」という含みがある。⁽¹⁴⁾この見解に基づき、リアリストは国際政治に対して相対的にプラグマティックかつリアルポリティックなアプローチを主張する。他国はそれが自からの国益に適わない限り助けてはくれない場合、国家は自国の利益を守ることが第一で他国の繁栄を心配するのは二の次、というのがリアルポリティックの一原則である。リアルポリティックの一つの基本は、自身の国益をまず守ることである。リアルポリティックを避ける国は「簡単に他国のパワーの犠牲になる」というモーゲンソーの見解に従えば、自己犠牲の政策は愚かなばかりでなく、危険でもある。⁽¹⁵⁾これが、リアリストの目には自己犠牲政策と映るリベラルの主張にリアリストが慎重な所以である。

リアリズム派、特に古典リアリズム派は、為政者の理念や意思決定について懐疑的な見解を持っている。国家指導者は必ずしも「力の原理」どおり国策を決定しているわけではなく、その国の道義や思想などを「パワー・リアリティ」よりも優先させる場合があると見るためである。⁽¹⁶⁾国家の利益を犯してまでも国際正義を求める行動をモーゲンソーは、「愚かなばかりでなく危険」と言い切る。⁽¹⁷⁾

モーゲンソーはさらに言う。「個人は（抽象的な原理のため）自らを犠牲にする道義的な権利を持つ」が、国家は国際社会で生存競争に勝ち抜くことが善とされる原理が存在するため、「国益を追求する政治行動」に対し異議を唱える権利は持ち合わせていない。¹⁸⁾

一方、ネオリアリズム派はどうだろうか。同派は一国を動かす「力の原理」に対する国の意思決定の動きを重要視しない立場をとる。これは、国家をチェス盤上の「駒」あるいは国際社会と言う舞台の「演者」の一人と規定するためである。国家としての動きは、意思決定機関の中心に誰がいようと、過去の動きからある程度予測できる。国家を合理的アクターと考える。このためネオリアリズム派の関心は、ある環境下においてその国がどのように動くのか、その法則を明らかにすることに重点が置かれている。しかし、リアリズム派が常に没道義的主張を繰り返しているわけではない。¹⁹⁾ 国民の利益を守ることこそ国家の道義的使命と論ずる研究者もいる。さらにネオリアリストらの一部には、国家がより繁栄し、自国の安全保障をより確かなものにするためには、国益を優先するよりも国家の道義性に重きを置くべきとする論者も存在する。

次に挙げられるリアリズム派の原理は、それぞれの国家は他国間との力の均衡を維持する政策（バランス・オブ・パワー）をとるべきとする考え方である。勢力均衡論として表現される。国際舞台での主要キャスト同士の衝突・戦争を避けるには、その均衡が破れないよう、一方の経済力や軍事力、国際的な指導力や貢献が突出しないよう、他国と同盟を結んだり、逆に相手国の国際関係を崩すよう働きかける。

この基準に従えば、外交官は、他国あるいは連立した国々がシステムを支配することのないよう、世界において勢力均衡を達成するために努力すべしということになる。これには、自国の力を増強する、他国と同盟する、敵を分断するなど、さまざまな方法がとられる。この考え方は十九世紀から二十世紀初頭において広く用

いられた。特に、第一次世界大戦の「同盟国」対「枢軸国」の概念はバランス・オブ・パワーの考え方が強く影響している。では、現在もバランス・オブ・パワーの考え方は有効であろうか。今日、バランス・オブ・パワー理論はあまり有力ではないという考えも存在する。それは、国際社会において、米国が唯一の超大国となつたためである。しかしながら、米国の著名な歴史家ポール・ケネディに代表されるように、まだまだこれを支持する学者は少なくない。一定地域内でのバランス・オブ・パワー政策は、戦争の勃発を食い止めることが出来るかもしれない。²⁰⁾

三番目に挙げられるリアリズムの原理は、国際社会で平和を維持するには地域をリードする覇権が必要だと言う見方である。これは覇権安定論とも呼ばれ、例えば、日本や韓国、台湾が第二次大戦後、短期間のうちに経済的な繁栄を遂げることが出来たのは、米国のプレゼンスがあつたためとする。

覇権安定理論に関連させ、リアリズムの原理は「力による平和維持」を強調する。軍事力や経済力などの「力」なくしては、平和を維持できないと見る一方、第四の原理として覇権国家は瑣末な目的や達成できる見込みのない目標のために軍事力を行使することはしないことを挙げることができる。

世界は危険であるがゆえに国家は武装する必要があるとリアリストは信じる。リベラルは、多くの国家が重武装するがゆえに世界は危険であると反論する。モーゲンソーは、本来の目的でない領域での資産の無駄使いだという理由で、早くから米国のベトナム戦争介入には批判的だったが、これは注目に値する。ベトナムが米国の利益にとって埒外（らちがい）であるとみた。後年になって、二人の著名なリアリストが二〇〇三年のイラク進攻に反対したが、その理由は、サダム・フセインをすでに抑え込んでおり、米国の資力の耐え難い支出が必要となるかもしれないのに、わざわざ放逐などしなくてもよい、というものだった。²¹⁾ 要するに、「サダム

・フセインを八方塞にしておく必要はあるが、そのために戦争をする必要はない」と書いている。⁽²²⁾ 慎重さはリ
アリストの標語（スローガン）だが、時として孤立主義に傾く傾向がある。

一方、リベラリズム派の考え方はどうであろうか。

五 リベラリズム 原則の強調 国際協調

リベラリズムの考えは理想主義から派生したものである。世界を完全な世界にすることは可能で、人間に
は、正しい制度を選ぶことによって、世界を、完全とまではいかななくても、少なくともより良い場所にするた
めの利他精神が備わっている、というのがリベラリズムの中心仮説で、理想主義アプローチと一致するもの
である。⁽²³⁾

理想主義から派生した従属理念は従属理論として発展してきた。第二次世界大戦後の二十一年間でヨーロッパ
諸国の植民地のほとんどが独立し、国連に加盟した。植民地主義の終焉は時の一大イベントだった。独立国が
抱える問題の一つは、できるだけ効率よく工業化するためのシナリオを練りながら、いかにして経済を發展さ
せるかであった。時が経ち、独立国の多くは経済的に豊かになっているようにみえたが、工業国という意味で
は、そこまでの発展はしていなかった。そして新しい理論である従属論（dependencia 西語、dependency 英語）
が生まれた。語源はスペイン語だが、それはこの概念がスペイン語圏の中央アフリカから南アフリカで發展し
たからである。

政治参加はさらに私たちの理性を發展させる、とりべラは主張する。民主主義は最上かつ究極の政治形態

である。なぜなら、市民が候補者や争点を自分たちなりに理解したうえで、自分たちのために決定を下してくれる代表を選ぶからである。選挙過程を通して当選した候補者は有権者に責任をもち、専横な行動をとれないようになっていく。その結果、政治システムはさらに安定し、経済はいっそう繁栄する。民主主義は市民に十分な安全を提供するので、その結果、市民は他者を思いやる余裕がもてる。

リベラリズム派はリアリズム派の「力の政治」観、すなわち国と国の紛争を恒常視し、「戦争のない状態は一時的なもの」とする考えを批判する。逆に、国際間の相互依存性が高まり、民主主義が定着することで、国際協調がもたらされると見る。いみじくも、ネオリベラリストの論客コヘインとマルティンは、「協力によって共に利益を得られる場合は……各国政府は」協力関係を促進するための国際組織を「構成しようとするだろう」と主張する。そして国際組織ができれば、「相互作用を促進する」さまざまな恩恵を加盟国に提供し、協力関係がさらに拡大する、と主張を続けている。⁽²⁴⁾

古典的リベラリズムの嚆矢は第一次世界大戦後、国際連盟の設立に奮闘した米大統領ウッドロー・ウィルソンが挙げられる。ウィルソンの人間観は、人間や国家は政治的な闘争を超え、一方的な欲望・利益の実現よりもお互いの譲歩・協調による互恵関係を結ぶことができるというものである。一個人ではなく社会の構成員が協力することによってより大きな利益を生み出すことができると見るルソーの社会契約説の流れを汲む。

古典的リベラリズム派は、国際社会の共同体が協力することでより平和で安全な国際秩序・国際共同体が生まれ得ると考える。一方、冷戦崩壊後、古典的リベラリズムが説明できなかった旧ソ連の平和的解体に対し、同派の欠点を補う形で誕生したネオリベラリズム派は、ネオリャリストの「無秩序な国際競争社会」と言う概念を認めつつも、より有効な国際機関を構築することで国際協調を達成することが出来ると説明している。

新旧リベラルの思潮は、国家が力を獲得しようとするダイナミズムが国際政治、国際関係の本質だとは見ていない。国際政治学・国際関係論が目指すものは、国際協調の道を探ることであり、倫理的な行動規範を形成させることと定義する。国際間に秩序と安定、平和をもたらしべきとする考え方を前面に打ち出している。

リベラルは、戦争は必然ではなく、暴力を取り締まるあるいは抑制するための制度を完全なものにすれば、回避することができる、と主張する。したがって、リベラルは国連の強力な支持者で、世界における国連活動の拡大と強化を模索している。

古典的リベリズム派とネオリベリズム派の決定的な違いは、国家主権と国際機関との関係に対する理解である。古典派の場合、国家主権を維持しながら、国際協調の道を探ることが出来ると見る。一方、ネオリベリズム派は、より強力で広範囲な国際協調・国際的な利益を追求するには、国家主権の一部を国際機関に譲渡する必要があると見る。

このほか、国際関係論第三のアプローチとして、最近、注目されているのに環境学的パラダイムがある。これは、世界は地球規模のエコシステムの集合体であり、環境資源は限られているため、地球を保護するためにも、持続可能な発展を目指すべきとするものである。国際関係研究者の中にはこの派をリベリズムと一線を画して分類しているが、人間観や政治観、また国際協調に関する見解など、ネオリベリズムと一部が重複する。さらに、アル・ゴア元副大統領などリベラルな政治家が環境学的パラダイムに力を入れているため、米国ではリアリズム派を中心にリベリズムの一種として見る傾向が強い。

六 現実と理想の融和

リアリズム派は、伝統的にリベラル派の国際協調・倫理優先の論調に「国益を蝕む恐れあり」と指摘してきた。実際、国益が絡む場合、リベラルな思考を常とする指導者の多くが、現実的な政治思考（リアルポリティック）による判断を取ってきた。国際連盟・国際連合の両機関も歴史上、有力国の国益の対立があった際、これを見事に乗り越え、有効に機能し得たことは一度もなかった。さらに、これまでの国際関係史を見ても、国際協調よりも国家間・ブロック間の対立が世界情勢を動かしてきたことは確かである。

こうした歴史的事実からも、国際政治学はそれが客観的に現状を分析し、来るべき国際情勢を予測する学問と定義するのならば、リアリズムの視点が優先されるべきだろう。

ならばリベリズムは、大学研究者達の不毛な理論であり、影響力のないユートピア的理想かといえは、そうではない。これまでずっとリアルポリティックに立脚した利己主義が国を動かす主要な推進力であったには違いないが、国が時として協力的になることもあり、利他的になることさえあるのもまた事実である。さらに、競争し争うことはますます危険かつ破壊的となり、平和的に協力することが万人の私利になつていて、というのを諸国家が認識し始めるにつれて、リベラルのアプローチが勢力を増しつつあるといえるだろう。もつとも、私利と世界の利益は通常同意語であると断定できる一歩手前まで世界が来ていると主張するのは単純過ぎであろう。

そうは言うもののリアリズムな視点のみで、国際情勢が動いてきたわけでもない。第一次・第二次世界大戦における米大統領の戦争参加にいたる動機から始まって、クリントン大統領の民族自決を基調としたユーゴ空

爆やジョージ・ブッシュ大統領の対テロ戦争など、国際政治において現実よりも理念が重要視され、実行された事象も少なくない。二〇〇一年九月、テロリストとの戦いを宣言したブッシュ大統領の場合、民主主義、自由主義の促進が強調された。⁽²⁶⁾

国際経済秩序や人権問題への理解が向上し、各国間の相互依存性が増大し、国際社会で民主主義が浸透してきた。これまでのリアリズム的な定義とは違った「国益」のあり方も提供され始めている。短期的な国益を犯しても、「利他的」な行動を取らせ、長期的な国益を選択させる要因となっている。

近代国家の統治システムにおいて、為政者の無制限な欲望が許容されないと同様、国際社会においても、一国の利益よりも他者との共存を重要視する傾向が強まりつつある。これは、地域の安全保障や環境問題、国際金融・経済の動きなどで顕著である。

為政者にとって政治とは、他者を支配する技術にほかならない。国際政治の世界においても、近代に至るまで、秩序が不透明な状況の中、力によって自国の利益を確保することが主眼に置かれていた。これは今も変わらない。

国益の概念を解釈する場合には、二つの見方があるようである。その一つは、国益を長期的な立場からみると、短期的な立場からみる場合である。前者の場合には、現実よりも、むしろ理念を基礎にしている。こうした姿勢は、政府与党よりも、むしろ野党の考え方に近いのが普通である。一方、国益を短期的な立場から解釈する人々は、理念よりも、むしろ現実的な立場に立つ場合が多い。これは政府与党の国益解釈に近い。だが、この二つは分離されるより、むしろ混合した形で政策に反映するのが普通である。理想と現実の結合こそが外交政策の望ましい立場である。⁽²⁶⁾

国際政治とは、国家あるいは地域間の安全保障のみではなく、より包括的な要因を含んだ多国間・地域関係を処理し、国益の増大を図るものである。その中には、通商や金融経済、環境、地域の人権や貧困問題など多種多様にわたる。表面に浮かんでくる国際問題でも、有機的に関連し合っている要因もあり、単純に善悪を論じることは出来ない。

E・H・カーは、健全な国際関係理論はリアリズムと理想主義の融合から生まれると説明している。政治過程は、リアリストが信じているように、機械的な因果法則に律せられて継続する現象のなかにそっくりはめ込まれているのではないし、また、ユートピアが思いこんでいるように、賢明達識な人たちの意識の展開とされる理論的真理が実際にむけて適用されることのなかにおさまっているものでもない。政治学は、理論と実際とが相互依存の関係にあることの認識のうえに築かれなければならないのであり、このことはユートピアとリアリティとを組み合わせることではじめて達成されるのである。⁽²⁷⁾

七 おわりに

国際社会の目の前にある事象だけを捉えて、「一体何が起こっているか」を知ることは難しい。国際政治学が予測不能の学問と捉えられる所以でもある。理論は頭の中で描く地図であり、直感やさまざまな情報では理解しきれないやり方で国際政治を理解する手助けをしてくれる。理論は諸現象がいかんして互いに結びついていくかを述べた一般的記述、説明からなり、さらには国際政治を単純化し、国際政治の主眼点に注意を向けさせることによって、国際政治を理解しやすくしてくれる⁽²⁸⁾。ある意味ではそれぞれの理論の観点によって、幾通

りものジグソーパズルを作ることもできる。理論によって国際政治のダイナミクスに対する洞察を得ることができるので、問題解決への処方箋を描く作業が可能になると思われる。

注

- (1) W. Raymond Duncan, Barbara Jancar-Webster and Bob Switky, *World Politics in the 21st Century*, 2nd ed., Pearson, 2004, p.7.
- (2) John T. Rourke, *International Politics on the World Stage*, 4th ed., Dushkin Publishing Group, 1993, p.26.
- (3) Glenn P. Hastedt and Kay M. Knickrehm, *International Politics in a Changing World*, Longman, 2003, p.18.
- (4) Richard Falk, *Explorations at the Edge of Time: The Prospects for World Order*, Temple University Press, 1992, p.225.
- (5) トムス・ホブズ、水田洋訳『リヴァイヤサン1、2』(岩波書店(岩波文庫)、一九九二年を参照)。
- (6) Paul R. Brewer, Kimberly Gross, Sean Aday and Lars Wilhat, International Trust and Public Opinion about World Affairs, in *American Journal of Political Science*, Vol.48, No.1, January 2004, pp.93-109.
- (7) John J. Mearsheimer, *The Tragedy of Great Power Politics*, W. W. Norton, 2001.
- (8) Fareed Zakaria, Is Realism Finished?, in *National Interest*, Vol.30, Winter 1992/1993, p.22.
- (9) Kenneth Waltz, *Theory of International Politics*, McGraw-Hill, 1979, p.152.
- (10) Zakaria, *op. cit.*
- (11) Owen Harries, Realism in a New Era, in *Quadrant*, Vol.39, April 1995, p.13.
- (12) Duncan, Jancar-Webster and Switky, *op. cit.*, p.25.

- (13) John T. Rourke, *International Politics on the World Stage*, 8th ed., McGraw-Hill, 2009, pp.26-27.
- (14) Stephen G. Brooks, 'Duelling Realism', in *International Organization*, Vol.51, No.3, Summer 1997, p.473.
- (15) Hans W. Morgenthau, *Politics among Nations*, Knopf, 1986, p.38.
- (16) Rourke, *op. cit.*, 4th ed., p.27.
- (17) Morgenthau, *op. cit.*, p.38.
- (18) *Ibid.*
- (19) Michael C. Williams, 'Why Ideas Matter in International Relations: Hans Morgenthau, Classical Realism, and the Moral Construction of Power Politics', in *International Organization*, Vol.58, No.4, Autumn 2004, pp.633-665.
- (20) Duncan, Jancar-Webster and Switky, *op. cit.*, p.24
- (21) John J. Mearsheimer and Stephen Walt, 'An Unnecessary War', in *Foreign Policy*, Vol.134, January 2003, pp.50-59.
- (22) John J. Mearsheimer and Stephen Walt, 'Keeping Saddam Hussein in a Box', in *New York Times*, February 2, 2003.
- (23) Duncan, Jancar-Webster and Switky, *op. cit.*, p.28.
- (24) Robert O. Keohane and Lisa L. Martin, 'The Promise of International Theory', in *International Security*, Vol.20, No.1, Summer 1995, p.42.
- (25) President George W. Bush, 'Address to a Joint Session of Congress and the American People, Office of the Press Secretary', September 20, 2001. <http://www.whitehouse.gov/news/releases/2001/09/print/20010920-8.html>
- (26) 花井等『新国際関係論』、東洋経済新報社、一九九六年、六四頁。
- (27) Edward H. Carr, *The Twenty Year's Crisis, 1919-1939: An Introduction to the Study of International Relations*, McClelland & Stewart, 1996, p.42.

(28) Hastedt and Knickrehm, *op. cit.*, pp.20-21.